

# 町長

## ひとりごと

66

齊藤

譲



梅雨の合間の陽射しに、どこことなく真夏を感じさせる輝きと匂いがある。ついこの間、心新たに新年を迎えたと思ってい

たら、いつの間にか桜吹雪の花陰をくぐり、いまはもう青葉の中で雨に咲く紫陽花に、心を巡らせる頃となつてしまつた。今年も早や折り返し

点を過ぎ、本格的な夏の到来が真近に迫っている。時の流れ、季節の移ろいが、やたらと早く感じられてならない。人にそのことを話すと、それはあなたも歳をとった証拠だという。たしかにそう

かも知れない。十代から二十代にかけて、早く卒業から解放されて社会人になりたいと願い、社会人になれればなつた、早く周囲から認められる一人前の存在になりたいと

心焦らせていた頃は、時の流れの遅さに苛立ったこともある。それがいつしか三十代、四十代と歳を重ねるに従つて、こんどは逆に時の速さが気になりだしてくる。

時の流れは永遠に不変であるはずなのに、不思議な話である。

▼実はこんな話は、今までも幾度となく何人もの先輩から聞かされてきたのであるが、その時は自分には関わりのない他人事として思えなかつた。それは、他人が歳をとり、老いていく

様子はよく見えるのに、自分のそれには気づかない、いや自分は他人のように老いはしないのだという無意識の意識が常に働いているからかもしれない。

こんな身勝手な、かの曾呂利新左衛門は今際の際に、こんな意味のことばで辞世

を残しているとは何かで読んだことがある。

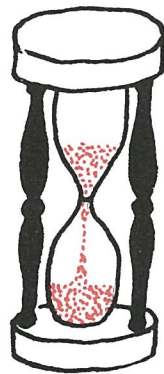
今までは

人のことのみ思いしに

俺が死ぬとは

これはたまらん

### 計時と砂



新左衛門ならではのなんと

もユーモアに富んだことばであるが、しかしこのことばの裏側には、人間の深層心理をズバリと言いつける鋭さがかくされている。

論語の教えに従えば、私も不惑の四十歳から間もなく九歳の馬齢を重ね、来年はいよいよ天命を知る五十歳を迎えることになる。卒

直にいつて今まで五十歳と

いう年齢は、私には遙か遠く無関係な存在だとばかり思っていた。だから、自分が本当にそんな歳になるのか未だもって信じられない

気持ちであり、まさに新左衛門の心境そのものである。▼人の寿命は、その人の生まれる前から決められているとよくいわれる。それが本当かどうか確かめる術はないが、私もそんな気がす

もする。

落ちる砂の量は常に一定であるはずなのに、砂の残りが少なくなればなるほど、その速度は加速度的に増していくように見える。もしかすると

私達が感じる時の速さは、この体内に嵌め込まれた砂時計が、折にふれもたらす感覚なのかもしれないと思つたりもする。



最高齢者で、杖こそついていっているものとでもお元気で、最後まで皆と行動を共にされた。息子の定次さんは、ふだんはとて

このように思いを巡らせていると、ふと両親のことが気になった。いや両親だけではない、上は九十代に至るまでの大先輩の方々のことがである。果たして、この大先輩達の目には、時の流れや、砂時計の砂はどう映っているのだろうかと思いつ及んだとき、私ごと

若僧が、したり顔でござかいことを多く言い過ぎたことに気づいた。反省の念一入であるが、先輩に対する尊敬の念もまた一層増してくる思いがした。

ともあれ、「親孝行した

い時には親はなし」のことばが頭を過る。

▼先月はじめ、「町民空の旅」で、一行250名と共に南九州を旅してきた。この一行の中に、長塚から参加した吉田ナカさん

定次さん(79歳)親子がいた。ナカさんは参加者中の最高齢者で、杖こそついていっているものとでもお元気で、最後まで皆と行動を共にされた。息子の定次さんは、ふだんはとてもあるが、「町長、今回はお袋のお守りだよ」といって、道中酒を断ち、終始お袋さんの側についていた。それでも時たま足の早いお袋さんを見失っては、大慌てをしていることもあった。お酒を同伴にしている時の定次さんに比べて、素面の定次さんはおかしかった。お袋に小違いだといつて、三万円貰ったよ」と定次さんはいう。まさに、「親思う心に勝る親心」である。